

矢内原忠雄没後 50 年

矢内原忠雄という名前を知っている人は、今では少なくなっているだろう。とくに 60 歳以下の人たちのほとんどが知らないのではなかろうか。矢内原は珍しい姓だ。ヤナイハラと読み、ヤナイバラではない。矢内原忠雄は、太平洋戦争後、東京帝国大学が東京大学になってから東大総長になった人で、任期は 1951-1957 の 6 年間（昭和 26 年 12 月から 32 年 11 月まで）だった。私が東大に入学した昭和 30 年(1955 年)は、矢内原総長の時代だった。

私は、昭和 30 年 4 月(多分 12 日)に東大安田講堂で行われた入学式で、矢内原総長の姿を僅かに横から見た。「僅かに横から見た」というのは、講堂内の座席に付いていなかったからだ。改修前の当時の安田講堂内部の形は現在のものとはかなり違っていたのだが、座席数は 1,300 ほどしかなかったはずだ。当時の 1 学年の学生数は約 1,800（現在は約 3,200）だったから、全員を収容することは到底できなかったのだが、そういうことを私は全く知らず、早く行かなくてはと思っていたことは確かだ。つまり、ボンヤリしていたのだ。何故か大学当局は新入生全員を収容する場所を確保しようとはしていなかった。今と違って、大きな会場というものがそもそも少なかったのかもしれない。入学式に武道館を使うようになったのは、昭和 40 年半ば以後のことだと思う。

半円形の安田講堂内部の造りはわかりにくいもので、私は、正面講壇に向かって左

横に当る多分 2 階か 3 階の入口まで行ったが、そこにも大勢の学生がつめかけていた。背伸びをして、ようやく他の学生の肩越しに矢内原総長の姿を僅かに見ることができた。総長が、告示の冒頭で「諸君は東大に入学することができて、誇らしく思っていることだろう」というようなことを言われたことは憶えているが、その他に何を言われたかは全く記憶にない。よく聞き取れなかったのかもしれない。

矢内原は、総長を退任して 4 年後の 1961 年（昭和 36 年）12 月 25 日、奇しくもクリスマス日に亡くなった。胃がんだったそうだが、末期は苦しいものだったようだ。しかし、矢内原は静かに耐えた。現在のよう、がん治療法が進歩していれば、もっと長生きできたであろうし、末期の苦しみも軽減できただろう。私は、このとき修士課程を終えて博士課程 1 年に在学中だったが、矢内原死去についての記憶はない。かつての総長が死去したという新聞のニュースに気付かなかったのかもしれない。私が、矢内原とはどういう人物であったかを知り、畏敬の念を抱くようになったのは、1968 年から 69 年にかけての東大紛争の時期より後のことだ。

今年は矢内原没後 50 年に当る。そのため、11 月初めに東京大学出版会から「矢内原忠雄」（鴨下重彦他編）が出版された。この本では、8 人の著者が矢内原のいろいろな面での活動について分担執筆している。このうち、鴨下を含む 3 人が生前の矢内原と

宗教上の付き合いのあった人たちだ。なお、鴨下は私より3歳年上で、東大医学部小児科教授、医学部長を経て、国立国際医療センター総長を勤めた人だが、この本が出版されて10日ほどあとの11月11日に死去した。この本が世に出るのを見届けての旅立ちだった。

私が矢内原に畏敬の念を抱くのは、私が生まれた昭和12年、日本が軍国主義に覆われ始めた時期に、そのような政治の流れに身を犠牲にしてまで反対したからだ。これは余程の勇気がなければできないことだ。東大の中には、軍国主義の横暴さに強い危惧の念を持っていた教授や助教授は相当数いたに違いない。のちに、矢内原の前任の総長となった南原繁法学部教授はそのひとりだったが、敢えて声をあげることはせず、意図的に象牙の塔に籠っていた。南原は、そのことで戦後自責の念にかられることとなった。

矢内原は、30歳という若さで、経済学部で植民政策講座を担当する教授に就任し、当時日本の植民地であった台湾、朝鮮半島、南洋の島々や植民地同様だった満州(現在の中国東北部)の諸事情を研究した。その結果として、日本の植民政策が正義に基づかないものであるという結論に達していたのだ。昭和6年(1931年)に起きた満州事変が駐屯する日本陸軍(関東軍と呼ばれた)の一部によって起こされた謀略であることを見抜いていた。

敢えて世の中の大勢に抗して、自らが正しいと信じたことを書き、語ったわけだが、それは学外右翼勢力から激しく攻撃されただけでなく、お膝元の東大経済学部の中に矢内原追放の動きを惹き起した。時代に迎合する教授グループがいたのだ。これがいわゆる矢内原事件だ。矢内原は、このような動きを全く予想していなかったわけではなかったであろう。彼はよく考えたうえで、強い決意を持って、植民政策を含む日本の政治の在り方を批判したのだ。

自分が正しいと信じたことを恐れずに言う、この矢内原の勇氣は何に基づいていたのか？ ひとつは研究成果に対する自信だっただろう。しかし、それだけだろうか？ これに対する答えを探して、私は結局、彼のキリスト教信仰に行きついた、この点は上記の本の著者たちにも共有されているようだ。矢内原は、第一高等学校在学中に、内村鑑三の教えを受けて無教会派の信者となり、その後自らの徹底した聖書研究を通じて、信仰を確たるものに高めたのだ。

矢内原によると、キリストの教えにしたがって生きるということは、自分と神との関係を深めるという私的なものに終わるのではなく、神の正義を世の中に実現するよう努力することを含むのだ。だから、時の政治権力が誤っている場合、それを批判することは彼自身の信仰の証でもあったのだ。この辺りは信仰上の問題なので、私にはついていけないところがある。それはともかくとして、矢内原という人物の基本はそこにあったのだ。

自分への攻撃が学内外で強まるなかで行われた、ある講演会で、矢内原は『…理想を失った日本を一先ず葬ってください…』と述べた。この発言が矢内原追放の火に油を注いだ。それまで矢内原をかばっていた長與又郎総長も匙を投げてしまった。そして、矢内原は自発的に辞表を書いた。辞表は1937年(昭和12年)12月1日付けなので、ちょうど75年前のことだ。その時、矢内原は44歳だった。

現在の東京大学新聞の前身である帝国大学新聞によると、辞表を出した直後の12月2日に行われた講義は感動を呼ぶものだった。その講義は、まだ辞表が認められていない段階で行われた通常のものだったが、300人収容の教室は普段の倍以上の聴講者で一杯になった。講義の途中に、すすり泣きも聞かれた。講義の最後に、矢内原は次のように述べた。『私は大学と研究室と仲間とに別れて、外に出る。しかし私自身はこのことを何とも思っていない。私は

身体を減しても魂を減ぼすことのできない者を恐れない。私は誰をも恐れもしなければ、憎みも恨みもしない。ただし身体ばかり太って魂の痩せた人間を軽蔑する。諸君はそのような人間にならないように…』そのあと教室は一瞬静まり返り、次に轟然たる拍手が湧き起こった。それに送られて矢内原は退室した。

太平洋戦争が1945年(昭和20年)8月15日に終わった後、東大経済学部では大幅な教員の入替えがあった。その一環として、矢内原は同年11月に東大経済学部の国際経済論講座担当教授に復職した。矢内原追放を画策した教授たちは東大を追われた。立場は完全に逆転したのだ。その後、矢内原は経済学部長、新設の教養学部の初代学部長を経て、昭和26年(1951年)12月に総長となった。

上で述べたように、矢内原追放の決め手となったのは、講演で『理想を失った日本を一先ず葬ってください』と言ったことだったというのが通説で、上記の鴨下らの本もこの説を採用している。しかし、2005年に出版された立花隆著「天皇と東大」(文芸春秋)には、立花自身が提出した別の説が記載されており、彼が用いている資料を見ると、立花説の方が正しいと、私には思える。しかし、鴨下らは、この立花の著書を参考文献リストに入れていない。立花の本は、2002年から2005年にかけて文芸春秋に連載されたものをまとめたものだ。上下2巻66章からなる大冊で、そのうちの2章が矢内原事件に当てられている。これだけの本を何故鴨下らは無視したのか、私は不思議でならない。

矢内原が辞職したのは昭和12年12月で、復職したのは20年11月だったから、その間には8年という長い年月があった。この間矢内原は何をしていたのだろうか？ どういう方法で家族の生活を支えていたのだろうか？ 矢内原自身は伝道活動を挙げている。日曜ごとに聖書講義をしており、「嘉信」という月刊の聖書雑誌を作成して

いたのだが、それは千部程度のものだったようだ。講読者は全国にいたらしいが、それから得られる収入を矢内原は自分の生活費には当てなかった。この他には、岩波新書の第1冊目、2冊目になったクリスチー著「奉天三十年」上下巻の翻訳出版、同じく岩波新書の「余の尊敬する人物」とその続編の出版などがある。これらの出版は岩波書店店主だった岩波茂雄の配慮によるもので、岩波は矢内原に金一封を先渡ししていたということだ。東大は、退職金の支払いにある程度の配慮をした可能性はある。それにしても、戦前戦中の8年間をどのようにして暮したのか、よくわからない。

没して既に半世紀になる矢内原という人物は、現代にどういう意味をもっているだろうか？ この半世紀に日本も世界も驚くほどの変容を遂げた。それにも拘わらず、矢内原が身をもって示した「言うべきことを言う勇気をもつこと」と「身体ばかり太って魂の痩せた人間にならないこと」の戒めは、いつまでも記憶されてよいことだと思う。(おわり)